

～ 星に願いを ～

7月7日は『七夕』です。七夕は広く知られた日本の伝統行事で、今も各地で様々な祭りやイベントが行われている夏の風物詩です。

この七夕について調べてみると、その起源は二千年以上前の古代中国にまでさかのぼります。日本には奈良時代のころに伝来し、日本古来の豊作を祈る祭り（現在のお盆）と習合したものと考えられています。当時の暦は月の満ち欠けに基づいて一か月を定める仕組みの太陰暦が使われていたので、現在の太陽暦でいうと8月初旬ごろが七夕になりますが、今でも7月7日を七夕としている経緯があります。七夕と言えば「夏」という感じがしますが、もともとは立秋以降の行事なので、実は七夕は「秋」の季語なのだそうです。

昔を思い描いてみます。梅雨が明け、晴天の日が続く夜空に、天の川がくっきりと見えます。それを挟んできらめく織姫と彦星の物語。二千年以上も前から人々はきらめく星たちの下で恋人や友人、そして家族とのんびりと語り合っただけに違いありません。満点に輝く星たちに、それぞれのいろいろな願いを、いろいろな未来を思い描いていたに違いありません。

現在はどうでしょうか。現在の暦となってからは、ちょうど梅雨の真っ最中となり（今年は梅雨があつという間に終わりましたが…）、なかなか天の川を見ることはできません。でも、それだけが天の川を見ることができない理由ではありません。むしろ一番の理由は、地上の「明かり」です。街灯やネオン、自動販売機、車のライト、工場や店舗。人間が作り出した光のせいで、真夜中でさえも煌々と照らされる地上では、星たちの輝きを奪ってしまいます。そう考えると、昔は手を伸ばせば届きそうなくらい近くに感じていた星たちが、今ではその明かりさえも感じないほどに遠くに感じてきます。いや、もしかしたら、すごく近くで力強く輝いている星があったとしても、見ようとさえしていないのかもしれない。

七夕もそうですが、「星」は人を惹きつける何かがあります。だからこそ、たくさんの星たちに名前が付けられ、星座が生まれ、今もなお、人は天体観測を続けるのでしょう。この機会に、ご家庭でも、ちょっと部屋のライトを落として、窓越しに風鈴をつるし、みんなでスイカなど食べながら、夜空を見上げてはいかがでしょうか。「あんなところに星が見える」「どの星も輝きはちがうけれど、どれもきれいだね」「いちばんぼし、見つけた！」そんな会話があちこちに聞こえてくれば、星の輝きも増し、本来の夜空を取り戻すかもしれません。

そういえば、私が小学生のころ、夏休みに友だち数人と計画して、真っ暗な夜、小学校に集まって星空観察をしたことがあります。築山の土管から見たその時の星空が、とてもきれいだったことを覚えています。今、考えると、そんなに遅い時間ではなかったと思いますが、当時はかなり夜遅くに感じて、すごくドキドキ、ワクワクしました。そのドキドキ、ワクワクが星空をさらに美しく感じさせたのかもしれない。

つつい忙しさに追われ、まさに心を亡くしてしまいそうな毎日ですが、学校では、子どもたちひとりひとりの輝きを見るために、ゆったりと地に足付けて、子どもたちと向き合っていきたいと思います。

目を凝らしても見えないけれど、キラキラと輝いているはずの星空を心の中で想像しながら、そんなことを考えた七夕の夜でした…。

西神吉っ子の一コマ

